

## 新福岡県立美術館整備事業 基本設計プロポーザル 公開審査（二次審査）議事要旨

日 時：令和5年1月21日（土） 12:00～17:30（審査は15:40～）

会 場：西鉄ホール

発 表 者：発表者① SUEP・昭和設計共同体

発表者② 株式会社 AS

発表者③ 株式会社 隈研吾建築都市設計事務所

発表者④ 西澤・EIKA studio 設計共同体

選定委員：委員長 宮城 俊作 東京大学大学院 教授

副委員長 小林 正美 明治大学 教授

委 員 稲庭 彩和子 独立行政法人国立美術館 本部主任研究員

委 員 内田 まほろ 一般財団法人J R東日本文化創造財団  
高輪ゲートウェイシティ(仮)文化創造棟準備室長

委 員 坂井 猛 九州大学大学院 教授

委 員 島 敦彦 国立国際美術館 館長

委 員 中村 拓志 株式会社NAP建築設計事務所 代表取締役

事 務 局：福岡県人づくり・県民生活部文化振興課新県立美術館建設室  
福岡県立美術館

[挨拶]

委員長

今日は土曜日、しかも比較的冬としては天気がいい暖かい日、お出かけしやすい日ではあったと思うが、かくもたくさんの方に傍聴をいただけるということで、私ども非常に緊張する一方でやりがいがあると考えている。

昨年11月28日に一次審査を行い、そこで選ばれた4者に本日プレゼンテーションいただき、最優秀者、次点者を決めさせていただく。大変注目を浴びているプロジェクトであるので、誠心誠意取り組んでいく。

[プレゼンテーション及び質疑応答]

（二次審査参加者4者が以下の発表順でプレゼンテーション(20分)、及び質疑応答(20分)を実施。）

- ・発表者①：SUEP・昭和設計共同体
- ・発表者②：株式会社 AS
- ・発表者③：株式会社 隈研吾建築都市設計事務所

・発表者④：西澤・EIKA studio 設計共同体

## [審議]

### 委員長

審査に向けて、各委員がどのような視点に立って発表された4者のプレゼンテーションを聞き、評価にあたってどのような考え方、視点をお持ちかというところを表明していただくところから始めたい。

●一次審査の時にも申し上げたが、私は3つのポイントを考えている。一つ目は、一番大事だと言われている日本庭園へのリスペクトを、具体的にデザインの中でどのように取り組むかということ。二つ目は、これから海外の企画なども呼ぶことになると思うが、既存の絵画や彫刻以外のメディア系のアートシーンに関するビジョンについて、いろいろな展示内容にどれぐらい対応できるかという将来的な可能性。三つ目は、隣の福岡市の美術館と連携していくのか、あるいは県の美術館としての違うスタンスを見せていくのかという、そこに明確な意思が見えるかどうかということである。

●ミュージアムの歴史が数百年、日本においては150年くらい、近代の美術館建築というと100年くらいのなかで、長く続けていくには、建築と運営とユーザーのバランスがとても大事。また、展示される美術品のあり方や、美術館のあり方自体も、物質から情報、対話に変わってきている。その前提を考えたときに、作品と関わる人たちの時代の変化に対応できる柔軟性や包容力が必須である。時間的にも、空間的にも、使われ方の提案の中に、どこかに隙間やバッファなど、時代が変わって計画や方針が多少違う方向になっても展開していけるような、そういう可能性があるものを期待して審査している。

●展示室やその他いろいろなスペースをフレキシブルにという点と、各諸室との連携がどのように生かされているかということが気になる。新しい空間ができると、それに刺激されて作品やアーティスト、あるいは学芸員の意識も変わっていく。個別の空間がどういった魅力を発揮しているかを見ていきたい。なによりも、できあがったらわざわざ博多に見に行きたいと思うかどうか、そのあたりが一番のポイントだと思う。

●一つ論点を申し上げると、大濠公園をどう考えるかというところに、様々な考え方、違いが見えたと思っている。「セントラルパーク構想」ということをよく言われてはいるが、個人的には、大濠公園はニューヨークのセントラルパークにはしてはいけないのではないかなと思う。あそこはもともと人工につくられた場所で、人工と自然が二項対立的にあって、富を持っている者だけが緑を眺められるという、囲い込まれている感じだが、ここはもっと日本の庭園文化的で、経験的、体験的につながっていくような庭のあり方というものを、都市

にひとつ問題提起できる格好の場所である。そういう意味では、公園側を重視するのは簡単だが、国体道路側にどのような庭園的態度を示しているかというところは、大事な要素ではないかと思う。

●都市計画・都市デザインの立場から、都市全体のコンテクストから見たこの美術館の拠点性に興味がある。伊都に移転した九州大学の担当だったが、移転元のひとつの六本松跡地が草香江校区の皆様と一緒に新しいものになってきたことを踏まえて、六本松へと向かう軸と大濠公園駅からのアプローチがそれぞれどう見えてくるのか、どうつながっていくのかというところに興味がある。あるいは国体道路側からどう見えるのかという都市景観上の視点、逆に美術館から大濠公園の水面、福岡城址を見る視点がどのように設定されているか、そのあたりを中心に、美術館のつくり方、プロセスについてもそれぞれの4者のアプローチを見させていただいている。

●新しい美術館が、多くの人に愛される美術館になることが求められている。その新しい美術館の姿の提案が、可能性の幅がありすぎても、うまくそれを活用できないことも考えられるので、新福岡県立美術館の持つリソースが、うまく全体がつながって、血が通った状態、血流がいい状態になることが大切だと思う。いろいろなチャレンジや提案があるなかで、どれが今この場にちょうどいいのか、ということを考える必要があると思いながら発表を聞かせていただいた。

#### 委員長

大濠公園が開園したのが1929年、このミュージアムの完成予定が2029年で、ちょうど開園100年目の年にあたる。次の100年に向けてのスタートとして、この公園に新しいアートと自然の関係がどのように打ち立てられるか、そのことをどれくらい今回のプレゼンテーションの中で感じ取ることができたかを重視したい。

もう一つは、日本庭園との関係についてで、皆さん当然考えておられることだが、今回の敷地には現在武道館が建っており、この建物ができたのが1979年で、実は日本庭園はその5年後にできている。つまり、中根金作氏は武道館の建物があることを前提にあの庭を作庭されている。外部との関係をもたない箱のような建物がなくなって、日本庭園との親和性が極めて高いミュージアムになるからには、そのことを強く意識した建築的な提案がなされてしかるべき。そういう意味で、一次審査の最後に、必ずしも現在の日本庭園の状態をリスペクトすることだけが解ではないと申し上げた。そういった観点からも、少し評価の軸を考えていこうと思っている。

#### [採点]

(委員7名が技術提案書の主題に沿って採点を実施。評価項目ごとの最高点1名分及び最

低点1名分を除いた5名分の採点を採用し集計（500点満点）

#### [採点結果発表]

##### 事務局

各委員の採点を合計した結果、最高得点を獲得した提案者とその他の提案者1者の得点差が25点以内の僅差となったため、この2者による決選投票となる。

発表者番号順にご紹介する。発表者②、発表者③である。

##### 委員長

今、説明があったように、採点結果は発表者②、発表者③、この2者が僅差、実際には満点の5%以内であったので、当初の採点、投票のルールに従い、決選投票をすることとさせていただきますと思うが、委員の方々よろしいか。

##### 委員一同

了承

#### [決選投票]

##### 事務局

委員7名が2者のいずれかに「○」を投票していただく。過半数の「○」、この場合4つ以上を獲得した提案者を最優秀者、もう一方の提案者を次点者とする。

（決選投票を実施。各委員が2者のいずれかに投票）

##### 委員長

決選投票の結果が出たので説明いただきたい。

##### 事務局

決選投票の集計結果をスクリーンに投影させていただきます。

発表者②：2票

発表者③：5票

##### 委員長

委員会で決めた決選投票のルールに沿って判断すると、最優秀者は発表者③、次点者は発表者②ということになるが、委員の皆様よろしいか。

## 委員全員

了承

## 委員長

それでは事務局から提案者の名称も含めてご紹介いただけるか。

## 事務局

二次審査の最終結果である。

最優秀者は発表者③、株式会社隈研吾建築都市設計事務所。

次点者は発表者②、株式会社A S。

それでは、最優秀者の技術提案書を投影させていただく。

(発表者③の技術提案書投影)

続いて、最優秀者の得点結果を投影させていただく。

(発表者③の得点結果投影)

主題1が150点満点に対して133点。

主題2が150点満点に対して122点。

主題3が100点満点に対して80点。

主題4が100点満点に対して83点。

500点満点に対して418点という結果である。

## 委員長

ここで最優秀者の提案について、まず私の方から少し振り返ってみたいと思う。傍聴の皆様は今日ずっとご覧になられ、プレゼンテーションもお聴きになられたので、やや簡潔な表現であっても十分にご理解いただけると思う。

この提案はアーバンスリットとメディアヴォイドという、ヴォイドの空間を直交させているところが特徴であり、アーバンスリットによって都市へのステートメントがかなり明快に表現されていて、それに直交するメディアヴォイドによって、アートと人のコミュニケーションスペースのあり方に一つの強いメッセージを込めて提案されている。また、公園と都市の繋がり、特に国体道路側から大濠公園側にかけて、たいへん視覚的な透過性の高い空間構成になっている。先ほど他の委員からコメントがあったが、公園は市民に開かれたもので、それがミュージアムの低層部を経由して街に対しても当然開かれているべきだということは私も強く共鳴するものであり、それが非常に明快に提案されている。

それからもう一つ大事な主題である日本庭園との関係だが、見ていただくとおわかりのように、西側から東側、すなわち日本庭園に向けて階段状に、垂直的な雁行の形で建築を徐々にスケールダウンをしていって、日本庭園のところに空間のボリュームをバランスよくおさめているところがはっきりしている。

先ほども歴史のことを申し上げたが、武道館ができた後に日本庭園ができているということは、私の理解では、あの武道館の跡に庭園との親和性の高い建築ができることによってはじめて、中根金作氏の日本庭園は完結すると思っている。中根氏は、当時武道館の建物をほとんど日本庭園の視界から消すことをお考えになって、あのようなかなり分厚い植栽帯がつくられている。3年前、私が最初に敷地を拝見したときに、武道館敷地の北東隅の部分に新しい建築がどのような形で顔を見せるかということが、かなり大きなポイントになるのではないかと考えていた。

この最優秀案では、そこに対してかなり明快な提案がされていると思った。日本庭園と建築の間になにかしら中間的な空間領域を設定するのではなく、建築と日本庭園がダイレクトに一体化している。これは実は日本の伝統的な建物と庭の関係で、その部分が現代的な表現によってしっかりと、空間的な解として提示されている。

今後、この方が設計を担当されることになると、県の担当者、学芸員、美術館の専門家の方々、今日もその分野の委員の方がいらっしゃるが、そういった方々とのコラボレーションの中で、大濠公園の次の100年のスタートにふさわしい、そのようなミュージアムができていくということを期待して私からのコメントとさせていただきます。

この後、もちろん最優秀者以外のいずれの提案も素晴らしいものなので、これらを含めて各委員からコメントいただきたい。

●どの提案もそれぞれの魅力があった。発表者①の提案については、そのプロセス自体がアートになる参加型の美術館づくりというところが、大きな提案の基盤になっていた。そのコンセプトはこれからの美術館の重要なポイントではあるが、それをどのように形にしていくなのか、建物のことと相まってどういう形にしてくのかということが少し見えにくかった部分がある。

発表者②の提案については、美術館に勤務している者としては一番使いやすそうで、まず運営がしやすそうであるところだとか、細やかなところまで解像度高く作られていて、こういう美術館があったらいいなと思った。

発表者④の提案については、4つの提案の中ではある意味一番新しい美術館のあり方を提案されており、これからの世代の人たちにとってこの美術館の提案はとても参考になり、それが形にも表れていて非常に好感を持った。

●私の視点は、先ほど申し上げた通り抜けと景観というところであり、夜間も広い通り抜けを用意されている発表者①と発表者③の提案は、どちらも高さが21mということで庭園に

面する施設としての慎重な配慮が求められると思うが、そのふたつがしっかりと設計されている点、それから大濠公園と日本庭園、そして福岡城址へのビューを確保されている点を評価した。

発表者②の提案については、最後に露地とおっしゃったのがどのように展開していくのかが見えなかったのが気になった。

発表者④の提案は、スロープについて豪雨災害等のリスクがどうしても気になった。

最優秀案については、ZEB READYの実現に向けて、美術館のスタッフ、技術のスタッフ、福岡県の方とのやり取りを十分にやっていただきたい。それから地域の方とのワークショップ、その実現を早期にお願いしたい。この案があったから選定されたわけだが、プロポーザルなのでやはり人が選ばれたということで、いろんなことをこれから吸収していただき、太陽光パネルのことも含めて福岡県の新しい顔になるので、世界に負けない美術館になることを期待する。

●どれも甲乙つけがたい非常に素晴らしい作品がそろい点数をつけるのが辛かった。

発表者①の提案は、県民ギャラリーが新しさのあるリボン状の出先機関となり、発表者④の提案の大きな風除室に相当するような、美術館の外に美術館が出ていって、興味がない人も中に引っ張ってくる効果を出そうという、大変意欲的な案であった。県民ギャラリーというところで少しずれてしまったところがあったのかもしれないが、とても新しい提案であった。

発表者②の提案は、美術館のことを本当によくわかっている細やかさがあり、同時に庭と展示空間の関係性をとても丁寧に設計されて、美術館は四角い祭壇にすることで日本庭園との対比と融合を上手に図り、グラデーションの中に繋げていくということが非常に卓越している。

発表者④の提案は、私も一番新しい美術館のあり方を提案していると感じており、素晴らしい作品で、これができてよかったのではと思っている。

いろんないいところがあるので、それを上手に取り入れながら、福岡県の素晴らしい美術館になることを期待している。

●いずれの提案も、大濠公園、日本庭園の美術館の立地をいろいろな形で解釈、分析して提案されていると思った。

発表者①の提案は、県民ギャラリーをかなり広く解釈された、これまでにない使い方の提案であった。そういった意味では、美術館のいろいろな活動の中で、運営も含めて今後どう進むかということがもう少し見えるとよかった。

発表者②の提案は、展示室の使い勝手は非常によく考えられていた。また福岡県立美術館のコレクションへの理解も非常にあり、活動の庭や交流の庭、情報の庭という形で、名称も含めて庭園との連動性を発揮されていた。

最優秀者となった発表者③の提案は、展示室の高さが3段階になっていて、それがシンプルに繋がって非常にわかりやすい動線を確認できている。なおかつ公開承認施設への配慮についてもご経験があるということで、古美術から近代、現代美術まで所蔵されている福岡県立美術館にふさわしい空間づくりになるのではないかと思う。

発表者④のチームも、展示室の、例えば壁面の利活用については非常にご経験があったので、具体的な壁の仕様の提案などの点が評価できた。

いずれの案も選ぶのが心苦しかった。

●はじめに、この大濠公園に新しく美術館を作るということ、それぞれの皆様がさまざまなアプローチで深く考えてご提案頂いたことに感謝申し上げます。

今回のプロポーザルでは、今後の美術館建築という意味での柔軟性と、逆に今までの経験値のちょうど間に来る建築が提示されているということも思った。

発表者①の提案は、地元のニーズや希望、エリアに対する細やかな調査から提案があり、ミュージアムを作る前から、さらにはエイジングしていく建築という提案が非常に印象的であった。こういう新しい建築の作り方は今後もいろいろなところで見られるのではないか。

発表者②の提案は、歴史や収蔵作品、運営者の行動まで、全般的に非常に分析が深く、完成度も高い提案であった。さらに庭園にも切り込んだアイデアも見事であった。

発表者④の提案は、運営者の視点だけではなく、お子様や日常使いをする多様な人々、美術館が好きな人たち以外も巻き込む余地のある提案であり、うまく頑張って運営をしていくと未来のユーザーを取り込めるような、権威的な伝統的な美術館ではなく、分散的な新しい時代のミュージアムの提案だったと思う。

最優秀者の提案は、新しさと今までの知見の集積のバランスが非常に良かった。作品やアクティビティをミュージアムにオープンにしていくという活動的な部分と、さらに収蔵作品が増えていくかもしれないといったときの拡張性のような運営面まで非常に配慮され、バランスが取れており、この2023年時点の建築提案として、極めて高い完成度があったと感じている。

#### 副委員長

最初に各案についてコメントをさせていただいたあとに、今までのプロポーザルまでの経緯も含めた振り返りのお話をさせていただきたい。

発表者①の提案は、シークエンスや最後のハイライトである「一番登ったところで大濠公園を見せる」というようなストーリー性は非常に評価できたが、リニアな展示、シナリオ作りについて、それだけで本当にいけるかなという懸念を少し抱いた。

発表者②の提案は、よく美術館を研究されて実践もされているので、2階の展示室の使い方は非常にフレキシブルで良いと思ったが、1階が少し複雑で、実際にこのようないろいろなプログラムを使いこなせていけるのかという不安が少し残った。



発表者④の提案は、分散型ということにチャレンジされて、アートのあり方や使い方の分布図などをとてもよく研究されていたが、規模的にもう少し小規模な美術館で実験されたら良かったのかもしれない、今回の県の美術館のスケールでは難しいのかなという感じがした。また、レベルを変えていろいろ工夫されていることが、少し全体の複雑さを増してしまったという気がする。

発表者③の提案は、透明感、英語で permeability と言うが、国体道路やいろいろなところから公園や庭園が見えるという、そういう建物の考え方を皆さん評価されたのではないかと思う。それから展示室のプランが非常にシンプルでわかりやすいということもあった。スケール処理は皆さん言われているように非常にきめ細かくされているが、庭園側から見たパースを見るとまだ少し大味な感じもするので、スケールの調整は必要だが、全体にはわかりやすい計画であった。

私も、新福岡県立美術館の基本計画を約2年間かけて検討し、それから今回のプロポーザルで1年ということで、3年間くらいかけてこの計画を進めてきた。最初の基本計画の委員会では展示方法のあり方だとか庭園の歴史などを研究した。池の近くで地下に収蔵庫を作れない、風致地区で高さが抑えられている、敷地も決して広くはない、というかなり難しい条件であったが、それでも皆さまが県と検討されてこの敷地がいいということで決められたので、どのようにそれをいい計画に導くかということに苦労した。基本的には若い設計者が参加できるように、できるだけ応募資格のハードルを下げようという話をしてきた。その結果、大手設計事務所がたくさん応募されたが、アトリエ系設計事務所もかなり応募していただいたので、当初の意図は実現したのかなと思っている。

一次審査については、これは県知事にも報告したが、できるだけオープンにコメントしながら選考を進めた。落選した建築家の方から、フェアに審査された印象だったので納得しているというようなコメントを頂いたので、一次審査の方法は間違っていなかったのかなと思っている。

今回の二次審査については、結果として、美術館について経験豊かな大御所的な建築家と、新鋭建築家が残った。私の個人的な経験では、本日はかなりおらかな審査会であったという印象だった。厳しいところでは応募者は密室で携帯電話を取り上げられたり、情報が洩れるので事務所関係者は傍聴不可というような規制をする審査会もある。今回は、全体におおらかな非常にわかりやすい雰囲気の中で進められたことはよかったと思う。

一つの敷地にいろいろな解釈で、多様な美術館のあり方が示されて皆さんで議論できたことは非常によかった。

これから県の方々、美術館の学芸員の方々と今回特定された建築家が密に連絡を取り合っ  
て、ぜひ世界から多くの人々が訪れるような、展示内容も濃く、そして評判の良い新しい福岡県立美術館ができることを期待している。

委員長

最後に私の方から御礼の言葉を述べさせていただく。

今、副委員長からも説明があったが、私も3年間にわたって基本計画の策定から今日まで関わってきた。まず、本日の二次審査にご提案された4者の方、それからその前の一次審査に応募いただいた35者の方々の努力に深い敬意を表したい。

また、長期にわたり基本計画策定委員会の委員として、そしてプロポーザル選定委員会の委員として従事していただいた6名の委員の皆様には感謝申し上げます。そして何よりも、プロポーザルをこのような形式でかなりオープンに実施することは事務局の負担が大きいが、これを敢えて企画し実施されてきた福岡県の担当部局の方にも深くお礼を申し上げてしめくくりの言葉とさせていただきます。